



名曲の向こう側

第31回

日常生活でふっと物がなくなったとき、ノルウェーでは「トロルのいたずら」と言うそうです。トロルとは、北欧の伝承に出てくる山の精。「ムーミン（ムーミントロール）」や、わが国の「となりのトトロ」の着想源とも言われますが、毛むくじゃらで鼻の長い怪物のような姿でノルウェーの人びとにはおなじみです。日光に当たると石になってしまうので、夜間に動くとされています。

ノルウェーを代表する作曲家エドヴァルド・グリーグ（1843-1907）の作品にも、しばしばこのトロルが登場します。劇音楽《ペール・ギュント》の〈ドヴレ山の魔王の広間にて〉では、巨大なトロルたちが、王の娘を弄んだ主人公ペールを糾弾する場面が、おどろおどろしい感じに描かれます。ここで使われている旋律は、A.ダール氏によるとノルウェーではおなじみの童謡《リーサは学校に行った Lisa gikk til skolen》（譜例1）によるもので、それを短調で粗暴に変貌させて（譜例2）、ノルウェーの土の匂いを巧みに演出しています。「これは文字通り聴くに堪えません。でも私は、この皮肉を感じてもらえるだろうと期待しています」（グリーグが友人フランツ・バイエルに宛てた1874年8月27日の手紙から）

グリーグが生涯書き続けた魅惑的なピアノ小品集「抒情小曲集」にも、トロルが登場します。〈小人の行進〉の邦題で知られる Op.54-3（Trolltog、直訳は〈トロルの行進〉）では、日没後にトロルの群れが山から行進してくる様子を描いています。トロルは石にならないよう日の出前に山に戻り、日中は平穏が訪れますが（中間部）、夜になるとまたもぞもぞと動き出すのです。〈バック〉の邦題で知られる Op.71-3（Småroll、直訳は〈小さなトロルたち〉）は、Op.54-3 とよく似ていますが、もっとちょこまかとした、かわいらしい感じの描かれ方をしています。グリーグは身長152cmと小柄で、自らを「小さなトロル」になぞらえたりしていたようです。

1884年、グリーグは、ベルゲン郊外の湖畔にある自然豊かな丘に土地を購入し、そこに

あの曲って、そういう曲だったの!? ピアニスト内藤晃が、思わず「へえ!」と唸ってしまう「名曲の向こう側」に皆様をご案内します。

グリーグとトロル

内藤 晃

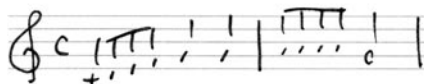


ヨン・パウエル
「王女とトロルたち」
(1913)

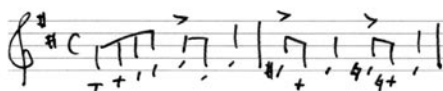


エドヴァルド・グリーグ

譜例1



譜例2



新居を建てました。グリーグの妻でソプラノ歌手のニーナは、この地を「トロルハウゲン」（トロルの丘）と命名しました。トロルハウゲンには、新居近くに小さな作曲小屋も建てられ、多くの名曲がここで書かれました。〈トロルハウゲンの婚礼の日〉Op.65-6は、1892年の彼らの銀婚式（結婚25年）を記念したものの。歌曲〈君を愛す〉Op.5-3などを贈って結ばれた2人は、愛娘の死や別居といった危機を乗り越えてきており、感慨もひとしおだったに違いありません。なお、ニーナ（Nina Grieg）の歌声は録音も残っています。

参考文献=アーリング・ダール著小林ひかり訳
『グリーグ その生涯と音楽』音楽之友社

推薦盤=ネーメ・ヤルヴィ指揮イェテボリ交響楽団 [DG] [〈トロルの行進〉は、グリーグ自身が《抒情組曲》としてオーケストレーションしている。]

レイフ・オヴェ・アンスネス（ピアノ）[EMI] [抜粋ではあるものの、ノルウェー出身のアンスネスのグリーグは大らかで澄んだ空気感が素敵。]

内藤 晃（ないとう・あきら）

ピアニスト・指揮者・作曲家。

「もっと深い音楽体験」への道案内をライフワークとし、独自の切り口による講座やレクチャーコンサートが好評。オーケストラの弾き振りも行う。「おながくしつトリオ」主宰。

（イラスト=◎いとう まりこ）



「と」ではなく「の」になっていましたか?